

論文

中国語と日本語との色名に関する比較研究

A Comparative Study of Color Names in Chinese and Japanese

呂 清夫 Lü, Ching-Fu National Taiwan Normal University

Abstract

Although Chinese and Japanese color names share deep connections, today each has followed a unique course of development. In research of Japanese color names, not only can the developmental relations between various color name set be seen, but the range of name choice or colors represented are also quite close. In contrast, in various color name set on Chinese color names, even where developmental relations can be discerned, considerable variation in range of name choice or colors represented exists. This essay hopes to explore through statistical analysis the reasons for such discrepancies, in the essay, a comparison of the majority of Chinese and Japanese color names and their colors represented shall be undertaken and developmental history of various color names traced in order to probe and discover the distinguishing characteristics of Chinese and Japanese color names.

要 旨

中国語と日本語との色名は深い関係を持っているが、現状はかなり違う方向へ発展している。要するに、日本語の各色名セットの間には、伝承関係（前人の著作をできるだけ参照すること）が確認出来るとともに、色名の選択範囲や、色名の代表色（色名が指示する色）が互にかなり近いのに対して、中国語の各色名セットの間には、伝承関係があるにしても、色名の選択範囲や、色名の代表色が互に、かなりずれている。本論はなるべく多くの色名とその代表色を、数値によって比較して、そして色名発展の経緯にたどりついて、それぞれの特徴を掴んでから、中国語と日本語との色名の上述の違いの原因を解明しようとした。

1. 緒言

中国語と日本語との色名はともに漢字を使うが、われわれはそれらの色名にふれる時に、相互に違いを感じる。例えば日本語の色名では、同じ色名ならば、どの文献を見ても、ある程度、近い代表色を見ることが出来るが、中国語の色名になると、その代表色が何時の文献かによって、かなり違って来る、どれが正しいのか見当が付きにくい。これは中国の地域が広く、歴史が古いためと考えられる。しかし同じ現代人でも、同じ地域で選定した中国語の各色名セットの間にも、この現象から免れられていないから、どの一つの色名セットを取り上げて、相変わらず中国語の色名世界を代表することは難しい。その原因がどこにあるのかが、この研究の契機である。

2. 比較研究の方法

今回の研究方法として、まず各重要な色名セットの間にある重複する色名を統計して、中国語と日本語との色名の選択状態を比較してみた。色名セットの間にある色名が互に重複する状態で、その色名の使用頻度を決めることについて、かつてアメリカの色名学者のメルツとポールとが行なっている。彼らは重要な色名の使用頻度を決めるために、アメリカとイギリスの大手ペンキ企業が発行した色名付きの色カードを比較して、その色名の重複する比率をパーセンテージで表示して、使用頻度 (the frequency of use)¹⁾とした。

筆者の研究も、色名の重複する状態を調べたものであるが、最高の使用頻度 (100%) の色名しか扱っていない。即ち色名セットの間にある使用頻度が100%の色名 (各色名セットすべてこの色名を使うこと) の多少によって、中国語と日本語との色名の選択状態における安定性を考察した。安定性の高い色名世界は、色名の選択範囲が比較的固定しているが、安定性の低いものは、その選択範囲が比較的分散していると思われる。そして、色名の代表色をも比較して、同じ色名も、色名セットによって、色名の代表色は互いにかなり近い、あるいはかなり違うかの両方が見られる。これは、色名の代表色の安定性についての考察でもあるが、かつてマンセル色彩財団は、「マンセル色票集の各色票の複製が、市販に耐えるかどうかを決定するのは」²⁾と、色の許容差をD. Nickersonの退色指数公式：

$I = (C/5)(2\Delta H) + 6\Delta V + 3\Delta C$ で決めている。この

I の値は本来が色の褪せて生じる色差 (色ずれ) を示すのに用いられるが、特長として色ずれの程度を算出するのに簡便である。つまり各色票をその基準値と比べた場合、その許容差を I の値で3.7 (3NBSに当る) までとしている。勿論、筆者が問題としている色名の代表色に関する I の値はこれよりずっと大きい。筆者の研究にD. Nickersonの退色指数公式を使用することに缺点がないでもないが、福田保教授が言ったように、「各色差表示方式はそれぞれ一長一短があり」³⁾、色名の代表色の場合には、何れもマンセル記号で表示される場合が多いから、簡便なるがゆえに当論文では「色のずれ」の程度をこの退色指数で算出することにした。色ずれの程度を退色指数で表示する例は、筆者の既報⁴⁾でも活用した。

勿論、重複しない色名と色名の代表色の色ずれは、本来、一つの文化的な問題である。異なる文字や時代や地域によって、さまざまなばらつきが当然存在している。しかし、同じ漢字を使う同じ現代人が、同じ地域に (例えば同じ中国の北部に) 編集した色名セット同士は、やはりかなりのばらつきが存在するならば、その原因は探求すべきであろう。それは色名の標準化の問題にとって、重要なポイントであろう。

3. 中国語の色名セット同士の比較

筆者が今まで研究に取上げた中国語の色名セットは、主に下の10種類が数えられる。

※1959年、周太玄等編集、「色譜」(「中国色名総覧」)、625個の色名を1,631色の新しく設計したカラー・システム・チャートに位置づけしたもの、色票がなし。

1984年、台湾塗料ペンキ同業組合発行、「ペンキ色票」、66個の色名と色見本、マンセル数値が付いている。

1984年、台湾塗料ペンキ同業組合発行、「水性塗料色票」、36個の色名と色見本。

※1985年、筆者著、「色名の初歩調査と研究」、178個の慣用色名、174個の系統色名、日本語、英語、フランス語の色名とそのマンセル数値の比較資料が付いている。1988年の続編「色名と測色」には、178個の慣用色名のエアー・ブラシによるアクリ顔料の色見本が付いている。

※1986年、王定理編集、「中国の伝統色」、320個の色名と印刷した色票集、色名ごとに、要約な説

明が付いている、そのマンセル数値は、Minolta CM-2002色彩計によって測定されている。

※1986年、全国織物流行色センター編集、「常用色名稱」、228個の色名と印刷した色見本、日本語と英語の色名が使っている。

※1989年、李慎泰編集、「色彩辞典」、351個の色名と印刷した色見本、二大冊に分けて、一冊は色見本、一冊は色名解説である。マンセル、オストワルトなどの数値が付いている。日本語と英語の色名が付いている。フランス語、ドイツ語、ロシア語の色名もたまに付いている。

1991年、呉山編集、「中国工芸美術辞典」、187個の色名、色見本なし、色名ごとに説明、もしくは色合わせの方法が書いてあるが、実際の図版が付いていない。

1991年、中国流行色協会編集、「実用定名色卡続1」、440個の色名と印刷した色票集、そのマンセル数値は台湾でMinolta CM-2002色彩計によって測定されている。

1993年、中国流行色協会編集完了、「中国顔色定名」、388個の色名とポスターカラーの色見本、そのマンセル数値は台湾でMinolta CM-2002色彩計によって測定されている。

この中には、「中国色名綜覧」と「中国の伝統色」とがあって、かつて日本で出版されたものである。「中国色名綜覧」の原典に当たる「色譜」は中国科学院編訳委員会による編集であり、目的は「生物学、鉱物学、染料、絵画の各領域における使用と研究の便利のため」と指摘されている。原本は、独自のカラー・システム・チャートを使うが、日本で出版したものには見つけられなかった。このチャートは編集者の設計に基づいて、刷り重ねて印刷したものである。編集する時に、まずカラーチャートを完成してから、色名の代表色を選択して色名を位置づけたので、編集者の意図通りに色再現することは、問題がないであろう。

「色譜」はメルツとポールの「色彩辞典」を参考にした35ページ、8色相の印刷によるチャートである。つまり図1に示したように、各ページの色相は、右上の純色（迎春黄の色名をここに位置づける）によって決定される。印刷する時に、垂直行はまず右から左へ、純色から次第に薄くなる、つまり7'行目は最も濃い、1'行目は最も薄い。乳白はごく薄い黄になる。つぎに水平行は、また二行目から下へ、次第に灰色み

	1'	2'	3'	4'	5'	6'	7'	
1	乳 白	杏仁黄	茉莉黄	麦秆黄	油菜花黄	佛手黄	迎春黄	(7.5Y)
2		菊蕾白			秋葵黄	硫華黄	柚 黄	
3				芒果黄		姜 黄	香蕉黄	
4						草 黄	新禾绿	
5		月 灰		淡灰绿				
6				草灰绿			碧羅春绿	
7	燕羽灰	蟹殼灰			潭水绿		橄欖绿	

図1 「色譜」にある第1ページ（黄色系1aの頁）のカラー・システム・チャートと色名の位置づけ

が加わる。つまり1行目はさきに印刷した色そのまま、2行目は少し灰色みが加わり、下へいくと灰色は濃くなる、7行目になると、本物のN5の灰色を重ねて印刷する。そうすると、橄欖緑＝純色の黄+N5の灰、燕羽灰＝ごく薄い黄+N5の灰色。

大日本インキ化学によって出版された「中国の伝統色」は画家王定理とデザイナー王崑との共同編集であり、色彩学者や美術家の歓迎を受けようとしている。そして、筆者が執筆した「色名の初歩調査と研究」はすでに、本誌に紹介されたように、色名の選定はすべてアンケートと文献調査によるが、色名の代表色は、動物、植物、鉱物、自然現象と関係のあるものについて、全部を測色で求め、文献に色の合わせ方や、作り方があれば、それによって代表色を求める。

「常用色名稱」は、まず1984年に、中国「全国織物流行色センター」の年間例会で討議されて、「全国における常用的な色彩の名稱を標準化する役割」を果そうとした。そして1986年に、正式に北京にある全国織物流行色センターによって出版されて、全部で1,000部が発行された。その編集例言に、「色彩のメッセージの交流や発信を便利にするために、全国における色彩の名稱を規則化、標準化しなければならない」と指摘している。

その内容として、全部で228個の色票が、7つの色系に分けられているが、ひとつずつの色票は、別々に色名と類似色名とが付けられ、そして、英語と日本語とマンセルの数値とが付いている。編集例言にも、この著作が「全国の色彩の研究者の長い間の願望であり、我国の色彩研究の科学化への始まりである。」とされていた。しかし、「常用色名稱」は、色名数にしても、色票のシステムにしても、上述の「色譜」（「中国色名綜覧」）を越えない。

「色彩辞典」は1989年に、瀋陽にある魯迅美術学院の故李慎泰教授によって編集され、日本の「色名總鑑」などの資料を、かなり参考にしている。全部が

351個の色名と色票とで構成されている。色票そのものは中国流行色協会によって製作されたが、色票と本来の数値との間に、場合によって喰い違いがある。

上海にある中国流行色協会(1981年に設立)も色名セットを発行した。まず500色以上の「実用定名色卡初編」を発行し、この「初編」を発行した年は不明だが、1991年にまた440個の色名の「実用定名色卡続1」を発行している。続1ということ、また続2、続3などがあるはずだが、1993年にいきなり「中国顔色定

名」、つまり中国色名の決定版の編集に入っている。実際には、「実用定名色卡続1」と重複する所が多かった。色名数が全部で388個しかないが、中国流行色協会がこれらの色名を「すでに全国に広範に使用されたもの」と指摘している。「中国工芸美術辞典」は1991年に台湾で出版されたが、この前にすでに呉山によって編集されて中国大陆で発行された。その中に187個の色名が収録されて、色票は付けられていないが、色名の由来や色名代表色の民間に伝承された色あわせ方が書き込まれている。

上述の10種類の色名セットにあふ「※」のある5種類を、特に取り出して比較すれば、それらの中で重複する色名は11個しかない。即ち1. 乳白, 2. 土黄, 3. 橄欖緑, 4. 檸檬黄, 5. 棗紅, 6. 茄皮紫, 7. 群青, 8. 孔雀藍, 9. 玫瑰紅, 10. 翠緑, 11. 青灰だけであるが、それらは中国語の色名の中で最も重要な色名でもあろう(表1, 表2)。比較の範囲を縮小し、ただ「色譜」, 「中国の伝統色」, 「色名の初歩調査と研究」の三者の重複した色名を計算すれば、27個の色名が互に重複している。これは後述における日本語の色名の場合と比較すれば、重複する色名がかなり少ない。そして、その中で色名の代表色が比較的接近した色名は乳白であり、「色譜」を基準としたこの色名の色ずれは、「中国の伝統色」が4.8, 「常用色名稱」が6.1, 「色名の初歩調査と研究」が7.4であるが、「色彩辞典」の色ずれはやはり18.4に達した(表1)。

互に極端に異なる代表色は、玫瑰紅(バラ紅)であ

表1 中国語の各色名セットにある重複する色名の色ずれの比較表A

重複する 色名	「色譜」の色名のマンセル 数値	「色譜」を基準とする色ずれの程度*			
		中国の伝統色	常用色名稱	色彩辞典	色名の初歩調査と研究
1. 乳 白 (乳白)	1.9Y 9.5/1.5	4.8	6.1	18.4	7.4
2. 土 黄 (黄土)	2.5Y 6.5/6	14.7	16.0	5.2	8.1
3. 橄欖緑 (オリブの緑)	10Y 4/6	11.5	11.0	32.5	13.8
4. 檸檬黄 (レモンイエロー)	2.5Y 8.6/8	22.4	32.6	19.3	19.2
5. 棗 紅 (なつめの紅色)	2.5R 3.5/7	1.8	6.0	17.3	23.9
6. 茄皮紫 (茄子皮の紫)	10RP 3/5	14.2	25.0	43.9	31.5
7. 群 青 (群青色)	5PB 4.9/9	21.4	—	29.7	45.8
8. 孔雀藍 (くじゃくの藍)	5B 6/7	86.1	46.5	5.0	48.9
9. 玫瑰紅 (バラの紅色)	2.5RP 5/11.4	51.3	20.5	30.4	78.8
10. 翠 緑 (青緑色)	7.5G 6/9	33.9	32.0	23.2	—
11. 青 灰 (青い石灰の色)	5PB 4.1/2.2	6.4	24.9	8.2	—
各色名の平均の色ずれの程度		24.4	22.1	21.9	30.8

* 説明: 色ずれの程度はD. Nickersonの差色指数公式で計算する。「色譜」を基準としたが、必ずしも標準を意味しない。

る。各種の色名セットの中で、「色譜」を基準とした色ずれは全部が20を越える数値になる。即ち色ずれとしては、「常用色名稱」が20.5, 「色彩辞典」が30.4, 「中国の伝統色」が51.3, 「色名の初歩調査と研究」が78.8である。日本のJISのバラ色(1R5/4)と比較すれば、JISの色ずれはやはり51に達した。このことは後述する日本語の色名の場合と比較すれば、これらの色ずれはかなり大きく、そして上述したように、中国語の色名セットの重複する色名がかなり少ないことと共に問題となる。

この原因は、「色譜」が出版時期のかなり早い著作であるためや、あるいは「色譜」が中国色彩学界にすでに忘れられたためか、「色譜」そのものが既に中国で見受けられないからであろう。筆者がかつて、上海の中国流行色協会の方々に、「色譜」のことを質問したが、全員が不詳のようであった。つまり色名研究が断層となっていると考えられるから、「色譜」を基準にした色ずれはなんとなく大きいと思われるのであろう。

しかし、伝承のある色名セットの間にも、色ずれが大きいという印象のあることは免れない。例えば「中国の伝統色」を基準にしても、同じ結果が出てくる(表2, 左の部分)。その最も大きな色ずれが、「色彩辞典」の孔雀藍であり、90.4に達した。中国語色名の中で最も酷い色ずれであった。「中国の伝統色」に見る色の選定者のひとりの王崑は、北京紡織工業局のテキスタイル・デザイナーであり、流行色の研究者でも

表2 中国語の各色名セットにある重複する色名の色ずれの比較表

重複する 色 名	「中国の伝統色」の色名のマンセル 数値	「中国の伝統色」を基準とする 色ずれの程度			「色名の初步調査と研究」の色名の を基準とする色ずれの程度		
		色名の初步調査と研究	常用色名	色彩辞典	マンセル数値	常用色名	色彩辞典
1. 乳 白	1.9Y 8.9/1.9	9.3	5.1	14.1	0.3GY 9.2/1.1	3.7	13.2
2. 土 黄	9.4YR 6.5/8	19.9	4.3	56.4	2.5Y 6.6/3.5	23.9	13.0
3. 橄欖綠	9.6Y 4.4/3.2	11.3	9.0	21.6	2GY 4.8/4.4	6.5	26.7
4. 檸檬黄	1.9Y 6.1/8.7	23.5	47.5	36.2	4.4Y 7.4/9.6	27.2	23.2
5. 棗 紅	2.2R 3.6/7.1	23.5	7.7	16.3	5.9R 2.5/3.4	15.9	28.0
6. 茄皮紫	7.6RP 3.6/2.7	37.9	26.7	37.8	0.5RP 3.2/7.3	6.4	15.9
7. 群 青	7PB 3.5/10.7	21.9	---	7.7	8.2PB 3.5/16.1	---	14.9
8. 孔雀藍	7.7PB 3.4/13.	39.9	37.7	90.4	2.9PB 2.9/8.8	11.7	52.1
9. 玫瑰紅	1.6R 3.9/8.7	36.6	52.5	25.3	6.2R 4/13.2	69.3	62.5
10. 翠 綠	1.3BG 3.9/5.6	---	11.1	26.4	---	---	---
11. 青 灰	3.3PB 4/0.6	---	21.0	8.1	---	---	---
各色名の平均の色ずれ		24.9	22.3	39.9		20.6	27.7

説明: 「中国の伝統色」を基準とする色ずれの程度には, 「色譜」の数値がすでに表1に示した(基準色と比較色が互いに交換してもその色ずれの数値が同じ)

, なお「色名の初步調査と研究」を基準とする色ずれの程度には, 「色譜」の数値もすでに表1に示した, 「中国の伝統色」の数値が表2の左半に示した。

あるが, 「色彩辞典」の編集者李慎泰がやはり中国の北京の学者であり, 上述したように, その辞典にある色票がやはり北京紡織工業局と関係の深い中国流行色協会に依頼したものであるから, 「中国の伝統色」と「色彩辞典」とが伝承のある色名セットであることは勿論のことである。

「常用色名稱」も全国織物流行色センターの出版物である, またその出版時期が, 「中国の伝統色」と同じ1986年であるから, 両者の深い関係が考えられる。それにしても, 「中国の伝統色」を基準にして, 「常用色名稱」の色ずれはやはり大きいほうである。その最も大きな色ずれ(玫瑰紅)が52.5である。それに対して, 伝承のない筆者の「色名の初步調査と研究」にある最も大きな色ずれ(孔雀藍)は39.9である。筆者は中国から遙かな南方で研究しているから, 上述の中国北部で研究したものと比較すれば, その色ずれが更に大きいはずである。しかしなんとといっても, 最も大きな色ずれはやはり上述の伝承ある「色彩辞典」の孔雀藍の90.4である。

そしてまた筆者の「色名の初步調査と研究」を基準とした場合, その最も大きな色ずれは, 「常用色名稱」の69.3(玫瑰紅)と「色彩辞典」の62.5(玫瑰紅)とである。その最も小さな色ずれは「常用色名稱」の3.7(乳白)であり, これは中国語色名の中でも最も

小さい色ずれであった(表2右の部分)。それにしても, 全体から見ると, どの色名セットを基準としても, ほぼ似た結果が得られるであろう。

4. 日本語の色名セット同士の比較

今までに発表された日本語の色名セットは, 主なものとして下の12種類が数えられる。

1931年, 和田三造編, 「色名總鑑」, 606個の色名, 160個の色見本が付いている。1935年増訂版刊行。

1933年, 日本標準色協会発行, 「色名帖」, 160個の色名を添えた色見本。

1943年, 上村六郎, 山崎勝弘著, 「日本色名大鑑」, 1948年に増訂3版, 82個の色名を添えた色見本。

1951年, 日本色彩研究所発行, 「色の標準」, 日本色名136個, 英語色名282個, 1,062色の色相別カラー・システム・チャートと関連するように図示してある。

※1954年, 和田三造監修, 「色名大辞典」, 974個の色名, 200個の色見本が付いている。色見本そのものの数値は, 1971年に, 小磯稔氏による視感比色に基づいたものである⁵⁾。

※1956年, 日本規格協会発行, JIS「色名帳」(JISZ8102準拠)。1985年改訂, 270個の系統色名, 及び168個の慣用色名, 合計438個の色名を添えた色見本。

1965年, 日本流行色協会発行, 「日本伝統色」, 1,118個の色名。そのうち300個を染色見本で示している。

※1979年, 湊幸衛監修, 「日本色名索引」, 実際には「中国色名綜覧」にある比較用の資料。530個の色名, 各色名は全部マンセルの色空間の中に位置付け。色見本はない。

※1980年, 山崎勝弘分担著, 「慣用色名」⁶⁾, 古代色名は82個, 現代色名は84個, 色見本はないが,

色名の説明が付いている。

※1986年, 日本色研解説, 「日本の伝統色」, 300個の色名及び色票集。筆者がMacbeth 2020⁺分光色彩計でその数値を測定した。

1986年, 尚学圖書編, 「色の手帖」, 358個の色名, 印刷した色見本に数値が付いているが, その数値がほとんどJISの「色名帳」と同じである。

1987年, 福田邦夫著, 「日本の伝統色一色の小辞典」, 154個の色名に印刷した色見本。

日本の色名の研究は, 専門的な著作, 一般的なものともに豊富である。通常よく見掛けるものとして, 少なくとも上記の12種類の著作をあげることができる。そして, ほとんどが日本で馴染まれた色名著作であるが, 例えば, 「色名大辞典」が「色名總鑑」を改訂したものであり, その色名一覧表の中に, 974個の色名が並んでいて, 外来語の色名が「色名總鑑」より, かなり多く導入されている。その一つの色見本の下に, 中には幾つかの色名が付けられている。例えば, 5PB3.5/9に相当する色見本に, 琉璃色, 金碧珠, ウルトラマリン, 露草色, 碧青, 碧琉璃などの色名と記されている。

そして山崎は「色彩科学ハンドブック」の中に「慣用色名」と題して分担発表しており, その中には, 海外古代色名, 日本古代色名, 現代色名, 流行色名の四つの部分を含んでいるが, 日本古代色名としては, 同じ山崎が共同執筆した「日本色名大鑑」(1948年に増訂3版)にある色名があり, 植物染料の染めの分野の色名であるが, 山崎の「慣用色名」にはこれらの色名にしか数値が付けられていないから, これがその最も重要な部分であろう。海外古代色名は勿論, 日本色名ではなく, 流行色名はある程度一時的ものであるから, その日本古代色名, 現代色名だけを取り出して, 上述の12種類の中に並べて比較した。

日本工業規格(JIS)で制定した「標準色名」にある慣用色名については, 1956年に73個, 1957年に118個, 1985年に168個と増えている。日本語の色名セットの中でも, 入力と時間が最もかかり集大成されたものという。その長い30年間に度重なる討議, アンケート, 検討を行ったが, ある色名の色に対し, 何を基準として選ぶか, そのHV/Cの決め方など, 未解決の問題はまだ残されていると聞く。

上述の色名セットにある「※」記号の5種類の色名セットを, 特に取り出して比較すれば, それらに重複

表3 各種の日本語色名セットにある重複する色名の色ずれ比較表(色ずれの程度は全部JIS「色名帳」を基準とする)

重複する色名	JIS「色名帳」のマンセル数値	日本色名索引の色ずれ程度	日本の伝統色の色ずれ程度	山崎慣用色名の色ずれ程度	色名大辞典の色ずれ程度
1. 松葉色	7.5GY 5/4	6.0	2.4	21.0	0
2. 紺	6PB 2.5/4	12.0	13.2	8.1	3.0
4. 納戸色	4B 4/6	10.7	12.8	34.0	3.0
3. 鶺鴒色	1GY 7.5/8	6.2	10.1	12.6	3.2
6. 白緑	2.5G 8.5/2.5	4.5	2.7	4.5	4.5
5. 海老茶	8R 3/4.5	5.6	5.8	34.8	5.5
7. 焦茶	5YR 3/2	3.2	8.0	4.0	6.0
8. 小豆色	8R 4.5/4.5	14.4	8.1	18.0	6.6
9. 桜色	10RP 9/2.5	0	8.8	30.3	6.8
10. ベージュ	10YR 7/2.5	3.3	5.4	—	7.0
11. テンダー	5P 6/5	3.0	14.7	—	7.5
12. 卵色	10YR 8/7.5	8.8	6.8	13.9	7.6
13. 代赭色	2.5YR 5/8.5	28	12.5	12.8	7.8
14. 淺葱	2.5B 5/8	0	7.5	26.5	8.0
15. 牡丹色	3RP 5/14	13.8	9.4	14.2	8.7
16. 缥色	3PB 4/7.5	15.6	12.2	18.0	8.9
17. 桃色	2.5R 6.5/8	0	9.6	9.0	9.0
18. オリーブ・グリーン	2.5GY 3.5/3	10.2	4.5	—	9.5
19. 利休鼠	2.5G 5/1	10.5	3.8	5.3	9.8
20. 群青色	7.5PB 3.5/11	3.6	8.9	9.9	9.9
21. 琉璃色	6PB 3.5/11	10.2	9.4	12.9	10.0
22. 黄土色	10YR 6/7.5	11.8	4.5	7.5	10.8
23. 萌黄	4GY 6.5/9	23.9	10.3	27.6	10.8
24. オールド・ローズ	1R 6/6.5	4.2	17.9	—	11.3
25. 山吹色	10YR 7.5/13	15.5	13.5	23.5	12.9
26. 藤色	10PB 6.5/6.5	18.3	8.3	35.9	12.8
27. 蒲色	10R 4.5/11	12.0	27.4	21.0	13.5
28. 蘇芳	4R 4/7	11.2	16.8	21.0	16.4
29. 鳶色	8R 3/2	23.6	18.1	24.6	17.8
31. 柿色	10R 5.5/12	3.0	16.5	12.0	18.0
30. 鬱金	2Y 7.5/12	21.6	12.9	15.0	19.0
33. ピンク	2.5R 7/7	15.5	8.7	—	23.8
32. 紺青	5PB 3/4	15.0	20.2	35.2	27.2
34. 紅梅	2.5R 6.5/7.5	20.0	11.1	4.5	28.0
35. 桔梗色	9PB 3.5/13	22.4	32.0	13.6	44.4
36. カキ	1Y 5/5.5	6.6	11.3	13.0	—
37. 緑青色	4G 5/4.5	15.6	8.0	19.0	—
38. 鶯色	1GY 4.5/3.5	6.0	9.8	21.6	—
39. マルーン	5R 2.5/6	0	24.8	—	—
40. フォレスト	10R 2.5/2.5	7.6	9.3	—	—
41. 墨色	N-2	—	—	—	—
色名の平均色ずれの程度		10.6	11.5	17.7	11.7

する色名が41個あり, そして中国語の色名セット同士と比較すると, その重複する色名数が遥に多かった。その中に, 色名の代表色が比較的接近した色名は白緑, 桃色, 焦茶, 群青色であり, 5種類の色名セットの中に, JIS「色名帳」の中の慣用色名を基準とした色

ずれば、いずれも10より少ない数値になる。例えば、桃色の色ずれとしては、「日本色名索引」が0、山崎の「慣用色名」が9、「日本の伝統色」が9.6、「色名大辞典」が9である。

そして、互に極端に異なる代表色は桔梗色である。5種類の色名セットの中には、またJIS「色名帳」を基準とした色ずれは、山崎の「慣用色名」を除けば、ほとんど20を越える。即ち「日本色名索引」の色ずれが22.4、山崎の「慣用色名」が13.6、「日本の伝統色名」が32、そして「色名大辞典」の色ずれが44.4である。それは、日本語の色名の中で最も酷い色ずれであろう。

もし個別の色名セットで言えば、山崎の「慣用色名」は、JIS「色名帳」を基準とした色ずれのほうが大きい、その平均した色ずれの程度は、各色名セットの中で最も大きい(表3)。それは山崎の「慣用色名」が染色の分野の色名のためであろうか、山崎の「慣用色名」の原典になる「日本色名大鑑」には、ところどころ染色の立場から、色名の代表色を批評し、例えば「緋色」という色名を見ても、世間の色見本が誤りやすいと見られて、「少くとも従来誤り考えられていたような、紅緋のような緋や、或いは赤蘇芳のような緋や、もしくは紫根染のような緋などは、茜染では決して存在し得ないことは誠に確かである。」⁷⁾と著者が言っている。代表色を決めた根拠は明確であるが、色ずれはかえって大きかった。それは丁度、「色譜」を基準とする筆者の色名の代表色の色ずれと同じであろう。

5. 中国語と日本語との色名セットの比較

上述したように、中国語と日本語のそれぞれ5種類の重要色名セットとの比較をすると、その各自の重複する色名数が大変違うことが見られる。つまり、中国語の5種類の重要色名セ

ットにある重複する色名数が僅かに11個であるのに対して、日本語の方が色名数の少ない色名セット(山崎の「慣用色名」)を含めても、その重複する色名数が41個と上回る(表4)。したがって、日本語の色名の選択範囲は比較的固定していると考えられる。

このことは背景から見ると、中国語と日本語とのそれぞれ5種類の重要な色名セットの中にそれぞれ3種類の色名セットに互に関係深いものがあるにしても、両者の差別がやはり存在している。即ち上述のように中国語の「中国の伝統色」、「常用色名稱」、「色彩辞典」は互に深い関係を持っているが、日本語のJIS「色名帳」、「色名大辞典」、「日本の伝統色」の三者にも日本色彩研究所と深い関係が見られる。関係の深いものが伝承のあることを意味するのであろうが、それにしても、中国語の色名の選択範囲がやはり比較的分散していると思われる。

色名代表色にしても、中国語と日本語との重要色名セットは異なる安定性を示した。表5に示したように、中国語の重要な色名セットの間には、「色譜」を基準として、他の色名セットにある色名の色ずれが0であるものが一つもなく、色ずれが0.1~10のものが24%

表4 中国語と日本語との重要な色名セットにある重なる色名の比較表

	発行時期	色名セット	色名数	発行時期	色名セット	色名数
色名セットの発行時間と色名数	1959	「色譜」(「中国色名鑑」)	625	1954	「色名大辞典」	974
	1985	「色名の初步調査と研究」	352	1956	JIS「色名帳」	168
	1986	「中国の伝統色」	320	1979	「日本色名索引」	530
	1986	「常用色名稱」	228	1980	「慣用色名」	166
	1989	「色彩辞典」	351	1986	「日本の伝統色」	300
重複する色名数	11			41		

表5 中国語と日本語と英語の重要な色名セットにある色名代表色の色ずれ統計表

比較する色名セット\色ずれの範囲	0	0.1~10	10.1~30	30.1~50	50.1~70	70を越える	合計
「色譜」と中国語の4種類の色名セット	0%	24%	44%	24%	2%	5%	100%
「中国の伝統色」と中国語の4種類の色名セット	0%	24%	44%	20%	7%	5%	100%
「色名の初步調査と研究」と中国語の4種類の色名セット	0%	17%	54%	17%	9%	3%	100%
JIS「色名帳」と日本語の4種類の色名セット	3%	43%	49%	5%	0%	0%	100%
中国語の「色譜」と日本語の「色名大辞典」	0%	11%	56%	22%	11%	0%	100%
英語の「色彩辞典」と「色の標準と命名法」	0%	48%	47%	5%	0%	0%	100%

説明: ①中国語の色名における比較対象が色譜、中国の伝統色、常用色名稱、色彩辞典、色名の初步調査と研究の5種類であり、日本語の色名における比較対象がJIS「色名帳」、色名大辞典、日本色名索引、慣用色名、日本の伝統色の5種類である。英語の「色彩辞典」と「色の標準と命名法」に関する比較は、筆者の論文「中国語と英語との色名に関する比較研究」を参照⁴⁾。

②表の中の0, 0.1~10, 10.1~30, 30.1~50……などが色ずれの範囲である。

③表の中の%は、各重要な色名セットにある重なる色名が、表の最左端の色名セットを基準にしたる割合の統計である。

を占め、色ずれが10.1～30のものが、44%を占めている。比較的大きいものとしては、色ずれが30.1～50であるものが更に24%を占め、色ずれ50を越えたものがなお7%を占めていた。もしさらに他の色名セットを代りに基準としても、ほぼ同じ結果が得られる。色ずれが大きいほど、まったく違う代表色になる傾向がある。それでは同じ色名で指定しても、意味が全くない。

これに対して、日本語の重要な色名セットにある色名代表色の色ずれは、比較的小さい。JIS「色名帳」を基準として、他の色名セットにある色名の色ずれ0であるものが3%を占め、それらの色名はほとんど同じ代表色を示した。そして色ずれが0.1～10のものが43%を占め、色ずれが10.1～30のものが49%を占め、これが比例の最も高いものであり、色ずれが30.1～50のものは5%しか占めない、しかも色ずれが50を越えたものは一つもなかった。この状態から見ると、日本語の重要な色名セットにある色名の代表色が、互にマンセル色票のように、3NBSの範囲にあるのではないとしても、中国語の色名セットの間にある色ずれと比べれば、その安定性は良好なほうであろう。

6. 「色譜」と「色名大辞典」との比較

中国語と日本語の色名著作の中に、特に625色の「色譜」と974色の「色名大辞典」とを比較することは、意味深い試みであろう。

本来、「色名大辞典」が1954年に「色名一覧表」を編集する時には、英語、フランス語、中国語の色名も同時に並んでいた。その時には、中国語の色名に関するまとまった著作がまだ出ていなかったために、「色名大辞典」は中国語の古典文献をかなり参考している。それは、日本語の色名の来由に関する考察にとっても、参考になるものであろう。それらの古典はつぎのようなものである⁹⁾：

周公旦著「周禮」	唐王司馬著「王建詩」
孔子門人著「論語」	梁顧野王著「玉篇」
魯左丘明著「春秋左傳」	符秦王嘉著「拾遺記」
漢劉安著「淮南子」	宋葉夢得著「石林燕語」
漢史遊著「急就篇」	宋鄭樵著「通志」
漢司馬遷著「史記」	宋王誅著「類篇」
漢小學家編「爾雅」	明張自烈著「正字通」
漢劉熙著「釋名」	明方以智著「通雅」
漢許慎著「說文解字」	明宋應星「天工開物」
魏張揖著「廣雅」	明李時珍「本草綱目」

これらの文献は、主に語学的なものであり、単語の

由来に関する考察にも便利である。「色名大辞典」の中の色名論考にも、上述の文献を度々引用しているから、中国語と日本語との交流の軌跡や、中国語と日本語との比較研究の必要性をも見ることが出来る。しかし、中国語の色名著作がなかったために、「色名大辞典」が必要とする時には、「上海で調査したもの、または松浦家所蔵の『絲かがみ』」⁹⁾によるしかない。それらによって、日本語の色名に添えて、時々中国語の色名も添えられている。例えば、肉色＝雪香、胭脂色＝猩血紅、黒色＝玄青、群青色＝品藍などである。

即ち、肉色、胭脂色などの日本語の色名の後に添えたものは、中国語の色名の雪香、猩血紅などである。実際には、このようなイコールの右の色名を使わなくてもよいだろうと思われる。何故ならば、肉色、胭脂色などの日本語の色名は、古来の中国語の中にも既にあった。イコールの右の中国語の色名を使えば使うほど、意味が更に判らなくなるであろうからである。中国語を使う人さえも、雪香、玄青などの色名は必ずしもよく判らなくなっている。

であるから、中国語と日本語ともに共有的な色名があれば、出来るだけ取り出すことは意味のあることではなかろうか。そして、もしそれらの色名の代表色があれば、また取り出して比較すれば、一層よいことであろう。調査と統計とによれば、両者の互いに重複する色名は34個であり（表6、7）、その中には、また、18個の色名のマンセル数値を求めることができる（表6）。

この比較から見れば、同じ色名にしても、色名の名づけ方は、やはり異なる習慣が見られる。表8に示したように、中国語の色名は末尾によく基本色名を付けるのに、日本語の色名の末尾にはよく「色」の字を付ける。例えば、動物の珊瑚、植物の橙皮、鉱物の琥珀などの色名を見るならば、中国語の場合は、珊瑚紅、橙皮黄、琥珀黄になるのに対して、日本語の場合は、珊瑚色、橙皮色、琥珀色になっている。灰白、銀灰、桃紅、鮮紅、乳白のような色名にしても、中国語の場合は、そのままよいが、日本語の場合は、「色」の字を付けるから、灰白色、銀灰色、桃紅色、鮮紅色、乳白色などになる。勿論、これは一般的な、あるいはよくある状況であるが、例外的な場合もある。

そして、色名の代表色として、銀朱、象牙色などのようなかなり似てくる色もあるが（色ずれが10より少ないもの）、桔梗紫、碧青などのようなまったく喰い違う色（色ずれが50をこえたもの）も見られる。「色

表6 「色譜」と「色名大辞典」とにおいて互いに重なる色名一覧表A (色見本のマンセル数値を求めることができる色名)

No	中国語の色名		日本語の色名		色ずれの程度
1	銀 朱	7.5R 5.5/13.5	銀 朱	7.5R 5/14	4.5
2	象牙黄	2.5Y 9/4	象牙色	1.5Y 8.5/2.5	8.8
3	粉 紅	2.5R 7.9/5	粉 紅	2.5R 8.5/2	12.6
4	鮮 綠	2.5G 6.4/8	鮮 綠	5G 5.5/8	13.4
5	草 綠	10GY 4/5	草 綠	2.5G 5/4	13.5
6	葡萄紫	2.5R 4/2	葡萄紫	5RP 4/4	15
7	肉 色	5YR 8/7	肉 色	10R 8/6	16
8	茶 褐	7.5YR 4.5/3.5	茶 褐	2.5YR 3/4 (JIS)	18
9	群 青	5PB 4.9/9	群青色	6PB 3.5/12	21.6
10	藤 黄	5Y 8.6/12	藤 黄	1.5Y 8/13	24.1
11	胭脂紅	7.5R 5.5/12	胭脂色	5R 3/12	27
12	珊瑚紅	5R 5.5/11	珊瑚色	7.5R 7/8	27.5
13	橙皮黄	7.5YR 7.5/14	橙皮色	2YR 6/14	39.8
14	暗 紅	2.4R 4/9	暗 紅	3RP 3/8 (JIS)	41
15	琥珀黄	10YR 8.1/10.5	琥珀色	5YR 5.5/6	45.6
16	殷 紅	7.5R 3.5/7	殷 紅	3RP 3/8 (JIS)	49.5
17	桔梗紫	5P 5.5/8	桔梗色	2PB 3.5/8	53.6
18	碧 青	7.5B 7.5/5	碧 青	5PB 3.5/9	57

説明：この表の中のHVC値が「色名大辞典」の元のものではないが、それらは小値後の測定による。

表7 「色譜」と「色名大辞典」と互いに重なる色名一覧表 (マンセル数値が必ずしも求められていない色名)

No	中国語の色名		日本語の色名	
1	蔚 藍	2.5B 6.5/6	蔚 藍	-----
2	海棠紅	2.5R 5.4/13	海棠色	-----
3	灰 白	2.5Y 8.4/0.5	灰白色	-----
4	茄皮紫	10RP 3/5	茄皮紫	-----
5	魚肚白	#8.5	魚肚白	-----
6	銀 灰	5YR 6.5/0.5	銀灰色	#8.5
7	黑 色	N-1.5	黑 色	#-1, #-1.5 (JIS)
8	月 白	5BG 9/0.3	月 白	-----
9	豇豆紅	10RP 6.1/5	豇豆紅	-----
10	翠 綠	7.5G 6/9	翠 綠	-----
11	霽 青	7.5B 8/4	霽 青	-----
12	雪 白	#9.5	雪 白	-----
13	鮮 紅	5R 6.1/12.6	鮮紅色	-----
14	天 藍	2.5PB 5/8.5	天 藍	-----
15	桃 紅	5R 7/8.5	桃紅色	-----
16	乳 白	5R 7/8.5	乳白色	#9.5 (JIS)

説明：この表の色名は「色名大辞典」の中では、ほとんど色票が付いていなかった。銀灰色、黒色、乳白色、ないし表7にある群青などの代表色は、実際には、JIS「色名帳」から借りた数値である。

譜」の桔梗紫は、「色名大辞典」のそれより、明度はかなり明るい。そして表5に示したように、両者の色ずれが10～30のものが56%を占め、色ずれが30～50のものが22%、さらに色ずれが50～70のものが11%になる。全体的にその色ずれは大きいほであるが、色ずれが70を越えた色名がかえって一つもなく、この点から見ると、中国語の色名セット同士に示した色ずれと比べれば、「色譜」と「色名大辞典」との色ずれは、かえって比較的小さい。

そして、両者には似ている代表色もかなりある。例えば「銀朱」がその一つであり、それは顔料名であるとともに、色名でもあり、きまりきった物体の参照が

できるからであろう。「色譜」の象牙黄と「色名大辞典」の象牙色とが、色名として少し違っても、その代表色はかなり近いものである。なお両者の「粉紅」もやや近い。ただし「色名大辞典」の粉紅は少し薄くなっている(表6)。

表6、表7の色名は、古くさいように見えるためであろうか、JIS「色名帳」の中に取り入れたものが多い。ただ胭脂色、珊瑚色、琥珀色、桔梗色、群青色、象牙色、橙(皮)色の7個の色名しかJIS「色名帳」の中に取り入れられなかった。しかし、筆者の調査から見れば、表6と表7の34個の色名の中の

表8 中国語と日本語の色名とつけ方式比較表

中国語の色名	日本語の色名
象牙黄	象牙色
胭脂紅	胭脂色
珊瑚紅	珊瑚色
橙皮黄	橙皮色
琥珀黄	琥珀色
桔梗紫	桔梗色
海棠紅	海棠色
灰 白	灰白色
銀 灰	銀灰色
群 青	群青色
鮮 紅	鮮紅色
桃 紅	桃紅色
乳 白	乳白色

表9 「色譜」と「色名大辞典」との重なる色名に対して常用の色名と思われる人数統計表 (筆者によるアンケート)

色名	人数	色名	人数	色名	人数	色名	人数
粉 紅	1263	灰白色	649	象牙色	303	黑 色	136
草 綠	1215	雪 白	649	魚肚白	285	殷 紅	122
天 藍	1197	桃紅色	647	銀灰色	218	茄皮紫	115
暗 紅	801	橙皮色	410	胭脂色	203	月 白	115
乳白色	781	海棠色	408	鮮 綠	184	珊瑚色	110
翠 綠	765	蔚 藍	383	葡萄紫	171	群青色	94
鮮紅色	712	肉 色	325	茶 褐	164		

説明：群青の94人でも多いほうである、というのは、10人以下しか認めない色名は大部分からである。

五分の四のものが、全部使用頻度の比較的高いものである(表9)。

即ち、筆者が台湾の1,815人に、「常用」と思われる色名を書かせて、1,349個の常用色名を収集したが¹⁰⁾、その中で人々の間で重複して書かれた色名が更に重要なものであろう。つまり重複するほど、その色名が一層重要となろう。筆者はこうしてその最も重複された146個の慣用色名、つまり1,349個の色名の頻度順位の最も上の146個を見付け出した¹¹⁾。そして銀朱、藤黄、琥珀黄、桔梗紫、碧青、豆蔻紅、霽青の七つの色名を除けば、残る27個の中国語と日本語との重複する色名は、ことごとくこの重要な慣用色名に属する。そして表9にある粉紅、草緑、天藍は、筆者の全部の調査の中で、ベスト3に入っている。

7. 結果と考察

1957年に日本の工業規格に制定されたJIS「標準色名」では、アンケートによってその118個の慣用色名を検討している。つまり、その制定に寄与した標準色名に関する委員会は、関西80人、東京826人を相手にして、これ(色名)を見てすぐその色が連想できるかどうかを調査し、回収した327部の質問票から見ると、60%の人が連想できる、馴染みの色名が57個であり、他の61個の色名があまり馴染みのないものであったという。馴染みの色名には11個の外来語の色名をも含んでいたが、そのベスト3が桃色、紺色、朱色である。あまり馴染みのない色名の中には、42個の外来語の色名をも含んで、「全くわからぬもの」とも思われ

ている。

この現実に対して、委員会は色々討議して、例えば、「一応50% (の人が馴染みの色名) で選択整理して行ったらどうか」、「60%位までは選択してよいと思う」、「どこで切るかが問題で結局普及度と思う」などの意見が出たという。これは今後のJIS「色名帳」の改訂の際の宿題となろう。

つまり、色名の選定範囲は、統計学の根拠があれば、色名セットが更に完璧になろう。表10に示したように、1985年版JIS「色名帳」に追加された重要な色名は15個であり、それらは5種類の日本語色名セットの重複する41個の色名(表3、表4)の中にも、37%を占めた。そして1957年版「標準色名」から取除く色名は藤紫、黒茶、紅桜色を除けば、全部が40%以下の人しか馴染みのない色名ということになる。

そして、ここで全色名数の最も多い「色名大辞典」を基準として比較すると、「色譜」のそれとの重複する色名数は、5%しかないが、JIS「色名帳」のそれと重複する色名数は9%であり、さらに「色名の初步調査と研究」のそれ(系統色名を含んだ数)との重複する色名数は12%であった(表11)。それは調査やアンケートを徹底にすればするほど、重複する色名数が多くなり、重要な色名が収集されてくることを意味するであろう。

色名の代表色にしても同じことが言える。筆者がかつて中国語と英語との慣用色名を比較してから、実物測色した英語色名セット同士と、主観判断した中国語色名セット同士とを比較したが、前者の色名の代表色の安定性が高い、つまり色ずれが小さいことを発見した⁴⁾。日本語の色名セットは必ずしも実物測色ではないにしても、「日本色名大鑑」のような染色の上にかなり実証的な立場を取るものもあり、「色名大辞典」のような古書にある色を重んじるものもある。川上の報告¹²⁾によれば、日本の色名検討委員会では、慣用色名における「代表的な色の三属性による表示」に対して、「人と時と土地のちがいでバラツキは昔からあって、これは避けられない」という議論があった。これは実証的な見方であろう。

また、外来語の色名に対しても、例えば、ボルドーといえ、ある定まった範囲があり、外国の原典などを参考として決めるより仕方がないという提案があった。これはまさに既成の内外資料に対する丁寧な参照で望ましいことである。上述のような実証的な立場のためか、表5に示したように、日本語の各色名セット

表10 JIS「標準色名」の改訂部分比較表

1985年版「標準色名」に追加した重要な色名	1957年版「標準色名」から取除く色名
鬱金 蘇芳 海老茶	藤紫 紺鉄 スレートグレイ サモン オリブドラフ
柿色 縹色 結梗色	黒茶 利久 モスグリーン シナ ベビーブルー
蒲色 白緑 緑青色	紅桜色 バンダイク インディゴレット ヲックス アートグリーン
紅梅 焦茶 瑠璃色	タイコ茶 スコッチブルー カーマイン クインレッド
墨色 ピンク オリーブグリーン	ミッドナイト クリムゾンレキ ザビヤギ ミディ

表11 各色名セットが「色名大辞典」と重なる色名数

色名セット	色 譜	JIS色名帳	色名の初步調査と研究
全色名数	625	168	232
色名大辞典と重複する数	34	15	27
重複する色名が各セットに占める%	5%	9%	12%

説明: 1. 「色名大辞典」の全色名数は974個である。

2. 「色名の初步調査と研究」の話し言葉にある全色名数には、143個の慣用色名と89個の系統色名を含んでいる。

同士の代表的な色ずれの程度がそんなに大きくはない。英語の色名セット同士のレベルに近い。

これに対して、中国語の色名セット同士は、あまり実証的な立場を取っていないためか、あるいは精確さの不足のためか（中国語の色名セットには、上述の日本の色名検討委員会のような討論があまされていない）、表5にも示したように、その代表的な色の色ずれの程度が大きいほうである、そして表1と表3にある平均した色ずれの程度から計算すると、日本語の色名の平均した色ずれの程度は、約12.9であるが、中国語の色名の平均した色ずれの程度は、約24.8であり、約日本語の色名の倍ぐらいである。

そこで中国語の色名セットのどれ一つを取っても、例えば日本で出版された「中国色名綜覧」や「中国の伝統色」のどれ一つを見ても、中国語の色名の特徴や風貌が認められない。どれか一つを選んで中国語の色名の代表とする、あるいは決定版にすることは、極めて危険と言わねばなるまい。中国語の色名研究が、日本の研究態度のようにもっと実証的な立場を取ることが今後の課題であろうと考える。

82 謝辞

終りに、この論文を纏めるに際して、千葉大学工学部矢口博久助教授、東京工芸大学芸術学部久保走一教授、並びに女子美術大学大学院川上元郎教授の御指導を賜わった。また日本工業規格の標準色名に関する委員会の実証的活動については、日本色彩研究所平井敏夫理事から詳しく御教示を頂いた。上記の諸氏に深く感謝の意を表する。

参考文献

- 1) A. Maerz, M. R. Paul: A Dictionary of Color, McGraw-Hill Book Co., Inc. (1950) 16.
- 2) D. B. Judd, G. Wyszecki著, 本明寛監訳, 「産業とビジネスのための応用色彩学」, ダイアモンド社 (1964) 333.
- 3) 日本色彩学会編集, 「色彩科学ハンドブック」, 東京大学出版会 (1980) 275.
- 4) 呂清夫著, 「中国語と英語との色名に関する比較研究」, 日本色彩学会誌15-3 (1992) 155~162.
- 5) 小磯稔著, 「色彩の科学」, 美術出版社 (1972) 188~198.
- 6) 日本色彩学会編集, 「色彩科学ハンドブック」, 東

京大学出版会 (1980) 535~563.

- 7) 上村六郎, 山崎勝弘著, 「日本色名大鑑」, 養徳社 (1948) 2.
- 8) 和田三造監修, 日本色研編集, 「色名大辞典」, 東京創元社 (1954) 98.
- 9) 同上注, 第109頁.
- 10) 呂清夫著, 「色名の初歩調査と研究」, 国立台湾師範大学 (1985) 13~17.
- 11) 呂清夫著, 「話し言葉にある中国語の慣用色名の研究」, 日本色彩学会誌18-3 (1994)。
- 12) 川上元郎著, 「JIS Z 8102物体色の色名の改正に当って」, 標準化ジャーナルVol. 15 (1985) 70

(受付日: 1994年8月23日)

著者紹介



リチンフ
呂清夫

1942年9月20日生
筑波大学芸術研究科, 構成専攻
1980年修士課程修了
国立台湾師範大学工芸教育学系及び大学院教授
日本色彩学会会員
芸術学修士
1985年9月から一年間, 筑波大学
客員研究員